

「キャリア教育実践事例」

①足柄高等学校	水上 慶太	④平塚中等教育学校	香取 利英
②上溝南高等学校	齋 孝徳	⑤深沢高等学校	大谷 英弘
③光陵高等学校	田島 裕明	⑥横浜明朋高等学校	伊藤 孝和

令和7年度キャリア教育部会の研究グループでは、昨年度に引き続きこの研究報告を見た方の参考となるよう、各校で実施しているキャリア教育に関係する実践事例を公開し、成果及び課題を検討することとした。記載形式としては、各校の実践事例の要項とその参考資料を配置している。

紹介している実践事例は、①足柄高校：キャリアナビ「ニュースピックアップ」を活用した自己理解と進路探究、②上溝南高校：卒業生による大学体験談、③光陵高校：教育実習生とのワークショップ「2032年の学校をデザインする」、④平塚中等教育学校：『じぶんラボ』『せかいラボ』—社会とのつながりと自己理解、⑤深沢高校：模擬裁判、⑥横浜明朋高校：総合的な探究の時間「スタート」、である。

各校の取組みの共通点としては、生徒が自身の進路について考える仕掛けづくりとして「自らの所属する社会」をきちんと知ることが主眼としている点である。①足柄高校では業者と連携して、世の中で起きているニュースにアンテナを張るために「Ashi 活」を行っている。これは短時間継続的に行うことで、単に興味を持つだけでなく、そこから自分の意見を文章化することまでを目的としている。同じように社会で起きているできごとに興味関心を向けていく取り組みとしては、⑥横浜明朋高校の「スタート」がある。こちらは教員が題材を自由に選ぶことから、自分では選ばないかもしれない題材に触れることも増え、興味・関心の領域を広げる効果も狙っている。⑤深沢高校では、少し「社会」の範囲を身近なものに絞り、

地域社会の一員として携わる可能性のある「裁判員制度」を題材に神奈川県弁護士会と連携して模擬裁判を実施している。②上溝南高校では職員から卒業生へのインタビュー形式での講話が行われているが、生徒の意識を高める工夫として19展開した少人数教室での講話がポイントである。より生徒自身のニーズにマッチできる狙いがうかがえる。④平塚中等教育学校では生徒の段階に応じて「じぶんラボ」と呼ばれる実社会を知ることによって生徒の世界観に揺さぶりをかけ、その後「せかいラボ」としてその社会の中で自分がどう生かせるかを考える取り組みを継続的に行っている。③光陵高校では所属する社会を生徒にとって最も身近な学校として絞り、「学校デザイン」を実施した。学校を知ること、継承していきたいものや改善部分などを様々な学年を混在させたグループで考えることで、学校教育への理解だけでなく意見形成に至る過程も学ぶことを目的としている。

このように、キャリア教育の目標の達成に向けて、また、生徒の進路実現に向けて、各校で様々な工夫をしていることがわかる。この報告が今後の活動の参考になれば幸甚である。

(文：大谷 英弘)

キャリア教育実践事例①

学 校	足柄高等学校
担 当 者	進路グループ
実 践 事 例	キャリアナビ「ニュースピックアップ」を活用した自己理解と進路探究
実 施 日 ・ 期 間	木曜日朝の 10 分間 通年
対 象 学 年	全学年

1. 概要

本校では、生徒一人ひとりの進路実現に向けた意識の向上と、社会に対する関心を深めることを目的として、朝の 10 分間を利用した活動「Ashi 活」が今年度からスタートしました。

Ashi 活は、生徒が自ら将来の「足」で踏み出す力を養うことを目指し、曜日ごとに異なるテーマで設定されています。このうち、木曜日の 10 分間を「ニュースピックアップ」の時間と位置づけ、生徒が世の中の動きを主体的に捉え、自らの進路や学習と関連付けて考える習慣を育成することを目指しています。

ニュースピックアップはベネッセコーポレーションが提供する「キャリアナビ」内のデジタル教材の一つであり、様々なニュースとそれに関する意見に触れ、それらを踏まえて自分の意見を文章化することで、社会への関心と論理的思考力、記述力を育成することができます。さらに、記事に対する興味の度合いを点数化（とても興味あり⇒＋2 点、興味あり⇒＋1 点、興味なし⇒0 点）することで、漠然としている興味の偏りや強さを可視化することができ、進路選択の際の指針とすることができます。

2. 活動内容

ニュースピックアップは、インプット(記事の閲覧)－思考(自分の意見の判断)－アウトプット(理由の記述)－蓄積(興味関心度合いの蓄積・多角的視点の獲得)というステップを短時間で効果的に実践できるよう設計されています。

ステップ1 インプット（約3分）

生徒は個人所有の Chromebook を利用し、キャリアナビにログインします。毎月 12 個程度配信されるニュースの中から、興味関心のある記事を選択します。その際、興味・関心だけでなく教科との関連や社会のトレンドなども観点にしつつ記事を選択します。そして、記事を読覧し、記事の内容や要点を自分なりに整理します。

ステップ2 思考（約3分）

次に、記事に対する架空の生徒のディスカッションを熟読し、自分の意見（賛成・どちらかという賛成・どちらでもない・どちらかという反対・反対）を選択します。架空のディスカッションでは必ず賛成・反対両方の意見があるため、考える際のポイント等を学ぶこともできます。

ステップ3 アウトプット（約3分）

意見の選択後、自分がなぜその意見を選択したかという理由を記述します。その際、なぜそう思ったのかについてきちんと文章化することを意識し、単語での回答にならないよう注意します。

ステップ4 蓄積（約1分）

閲覧した記事に対する興味の度合いを得点化（とても興味あり⇒+2点、興味あり⇒+1点、興味なし⇒0点）し、自分の興味関心について蓄積します。また、提出後に表示される全国の生徒の意見に触れることで、「一つの事象に対する見方や解釈は一つではない」という認識を深めることができ、自己の視点を絶対視せずに物事を多角的に捉える姿勢が育成されます。



ステップ5（後日） 興味関心度合いの確認

ステップ4で蓄積された興味関心度合いは、項目ごとに整理され、右の図のようにランキング化されます。生徒は、この「興味・関心カウンター」を基に自分の進路選択について考えを深めていくことができます。



3. 生徒の反応

実際に使ってみた感想を生徒に聞いたところ、以下のような意見が出ました。

- ・記事の見出しで気になるものが多い、面白い話題が多い。
- ・テレビやネットのニュース等ではあまり見ない記事もあったりするのが良い。
- ・中学までは文章書くのは苦手だったが、少し解消された。ただ、語彙力がまだないので文章を書くときに困る。
- ・日本と他の国の国際関係など、授業と関係するものもあり面白い。
- ・「興味・関心カウンター」については特に意識していない。
- ・ニュース記事だけでなくその後に生徒の会話があるので、自分の意見が書きやすい。
- ・今までよりもニュースを気にするようになった。
- ・たまに面白い記事があるのが良い。
- ・提出後に皆の意見が出るのが参考になる。
- ・普段はニュースを見ないので、最近の情報が知られてよい。

取り組み状況は個人差があるものの、概ね好意的に受け止められていると判断できます。

4. 成果と課題

今年度から開始した取組であるため数値的な効果測定は難しいものの、生徒の反応や、今年度の学校推薦型・公募制推薦の合格状況から、ニュースピックアップの取組は本校に適しており、自己理解・進路実現の一助となっていると判断できます。

しかし、社会の動きに関心が薄い1年生や進路未定の生徒の中には意見の記述ではなく記事の要約で終わってしまう者もあり、書き方のサポートが必要な生徒への対応が必要です。また、生徒のホーム画面に常に表示されている「興味・関心カウンター」についてもほとんど意識していない生徒もいたため、効果的な活用方法について定期的に指導していく必要があると思われます。

キャリア教育実践事例②

学 校	上溝南高等学校
担 当 者	キャリア支援グループ
実 践 事 例	卒業生による大学体験談
実 施 日 ・ 時 間	12月16日（火） 3, 4校時
対 象 学 年	2学年

1. はじめに

本校では、3年次より、理系・文系などを考慮したコース別のカリキュラムが設定されている。コースの選択は2年次の9月に行うが、この時点では、進路希望が確定していない生徒も少なくない。

こういった状況も踏まえ、昨年度の学校運営協議会では運営委員から、生徒の進路選択の幅を広げるためにも卒業生の大学生活の状況を生徒に聞かせる機会がほしいとの要望があった。これを受け、今年度からキャリア教育の一環として、「卒業生による大学体験談」を実施することとした。今年度は準備期間との兼ね合いで、12月の実施とするが、次年度以降は3年次のカリキュラム選択を考慮して、7月に実施する予定である。

2. 概要

様々な学習分野の卒業生を招集し、職員から卒業生へのインタビュー形式で、生徒に大学の体験談を聞いてもらった。生徒は3, 4校時に1人ずつ、計2人分の卒業生の話を聞いてもらった。インタビューの内容及び招集した卒業生の概要は以下の通りである。

【インタビュー内容】

① 自己紹介

何期生、氏名、進学大学学部学科（院まで進んでいればそちらも）、受験方法、現在の状況（就職やゼミ、メインとなる学習分野等）

② 志望校を決定した時期と、その大学の志望理由

高校在学中いつ頃決めたかや、決定したきっかけ等。また、第1志望ではない場合、進学を決めた理由等。他に受験や進学を考えていた大学などはあったか、またその理由など。

③ 実際に入学してから、高校との違いなどは感じたか。

単位制や時間割作成、同級生の雰囲気、学校の施設、学習内容、試験など様々な視点での違い。
入学後は実際にどんな勉強をしているのか（したのか）。

④ 生活の流れ

1日の流れ、一週間の流れ、学期間の流れ、各学年での流れ等中心に。

⑤ 自身の大学生活の中で一番良いところ

所属校の良いところや、大学生ならではのメリットなど。

⑥ 自身の大学生活の中で少し物足りないと感じているところ。

所属校への要望や、大学生のうちにこういうことをやりたい、やりたかった等。

⑦ 単位の修得や、学期の試験は難しいのか。

単位は落としたことがあるか、試験勉強はどのくらいやる必要があるのか、試験の難易度は？

日々の課題やレポートが大変とかあるか。

⑧ 進学してから、後悔などはなかったか。

自分のイメージしていた学問と違った、もっと高校在学中に調べておけばよかった等、あれば経験や理由とともに。

⑨ 将来に向けて、今頑張っているところ（または頑張ったこと）

大学卒業後の進路はどう考えているか（考えたか）。卒業後の進路は大学選びと一致しているかなど、

将来の就職に向けて特に力を入れて取り組んでいることや、関心のある学習分野についての深堀など。

⑩ 先輩として上南生に伝えたいこと。

進路選択をする上で大事なことや、こうしておけばよかった、高校在学中に特に力を入れて取り組むべきこと、頑張らなければいけない事や期間などあれば。

通番	系統	現在	大学学部学科	大学院専攻
1	工学	社会人	芝浦工業大学工学部機械機能工学科	筑波大学大学院システム情報工学研究群知能機能システム学位プログラム
2	化学	大学院2年	東京理科大学理学部一部化学科	東京理科大学大学院理学研究科科学専攻
3	看護	大学1年	北里大学看護学部看護学科	
4	電子	大学1年	横浜国立大学理工学部数物・電子情報系学科	
5	英文	大学1年	明治学院大学文学部英文学科	
6	経済	大学4年	明治大学政治経済学部地域行政学科	
7	社会	大学4年	法政大学社会学部社会学科	
8	工学	大学2年	東京都立大システム学部機械システム工学科	
9	社会	大学4年	東洋大学国際学部国際地域学科	
10	情報	休職中	青山学院大学理工学部情報テクノロジー学科	青山学院大学大学院理工学研究科理工学専攻知能情報コース
11	体育	社会人	國學院大学人間開発学部健康体育学科	
12	商学	大学2年	明治大学商学部商学科	
13	英文	大学4年	駒澤大学文学部英米文学科	
14	体育	大学4年	東海大学体育学部体育学科	
15	社会	大学2年	早稲田大社会科学部社会科学科	
16	経営	大学3年	國學院大学経済学部経営学科	
17	経済	大学3年	成城大学経済学部経済学科	
18	初等教育	大学2年	相模女子大学学芸学部子ども教育学科	
19	体育	大学2年	東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科	

3. 生徒の反応

各クラス 25 人程度、19 教室にて卒業生講話を実施しましたが、在校生は非常に前向きに、卒業生の話を聞いている姿が見られました。特に自身の将来のために卒業生にたくさん質問している姿や休み時間中に、卒業生に話を聞きに行く姿が印象的でした。



4. 成果と課題

今年度初めての試みであり、効果測定の数値はないが、実施後の生徒の振り返りアンケートにおいて、「卒業生のお話は、自分の進路を考える上で参考になりましたか」という質問を、4 件法で行ったところ、肯定的な回答が 9 割を超えていたため、生徒にとって貴重なキャリア教育になったといえるのではないだろうか。特に「卒業生のお話の中で記憶に残ったことを教えてください」という自由記述の質問にはたくさんの回答が寄せられ、中でも①大学生活・制度について、②受験・学習アドバイス、③留学・海外経験、④進路選択するうえでの心構え・気づき、この 4 つに分類される回答がほとんどであり、これらの情報に対しての在校生のニーズの高さが窺えた。

職員からも、生徒が進路選択するうえで有意義な取組だと、多くの肯定的な意見をいただいた。一方で、実施方法には課題があると指摘された。今回はインタビュー形式で行ったが、インタビュー担当の職員により、講話の展開の仕方が大きく異なることを指摘された。実際、卒業生より職員が多く話してしまったことや、インタビューが想定よりも早く終わってしまったことなどが、生徒及び職員から振り返りを通して課題として挙がってきている。

次年度は課題として挙げたものを整理し、生徒のニーズを更に満足できるような取組として昇華させていきたいと考えている。

キャリア教育実践事例③

学 校	光陵高等学校
担 当 者	キャリア支援グループ
実 践 事 例	教育実習生とのワークショップ「2032年の学校をデザインする」
実 施 日	令和7年11月6日(木)
対 象 学 年	第1学年・第2学年 計125名
実 際 形 態	・対象は学校設定科目「教職基礎」「教職基礎演習」履修者。 ・教育実習生をファシリテーターとし、グループで「現在の学校教育に含まれるもののうち、継承していきたいもの・改善が必要なもの」について意見を出し合う。 ・出された項目について、考えを共有したり検討したりして、また、意見を分類したり優先度について考えるなどして、学校教育について理解を深める。
外部団体・依頼内容	教育実習生(横浜国立大学教育学部学生)／ファシリテーション

事 前 指 導	・実施内容等についてプリント配信を通して把握させる。 ・意見について付箋に書き出しておく。 ・ファシリテーターである教育実習生へのレクチャー。
当 日 の 流 れ	全体60分程度。 ①グループ内で用意してきた付箋を模造紙の上に出し合う、新たに書き出す。 ②意見について質疑応答を通して考えを共有する。 ③意見を分類する。「授業」「教員の働き方」など ④分類された項目の優先度や重要度、改善への取り組みなどについて討議する。 ⑤重要と考えられるトピックについて発表し、他グループと意見を共有する。
事後指導・生徒の声など	振り返りレポートを提出させる。

成果及び課題等	問いの設定が難しい。はじめ「今の学校に足りていないもの」と「これからの学校に必要なこと」としようとしたが、うまく対にならず結果的にほぼ同義になってしまった。改案した実施案も議題として明確さが足りなかった。
留意事項等	特になし。

○「2032年の学校をデザインする」

教員志望の高校生と教育学部学生がこれからの学校について話し合う。

手順は上の「実施形態」「当日の流れ」にある通り。

生徒は「教職基礎」(1年)「教職基礎演習」(2年)履修者であり、教育に関する座学や授業見学を通し、学びを得てきた。教育学部学生は現場に出るまでのカウントダウンが始まっている。この両者がこれからの学校について、何を求めるのか、何を創っていくのか。自分がこれからなる教師という視点で考えることで、安易な批判・評論ではなく、自分事として考える視点を身につける。



○付箋に書かれている意見の共有を行った後、分類を行い、優先度・重要度を考える。

- ・分類することで、自分たちが何を話題としているか、重要視しているかが可視化される。
- ・分類として「教員の働き方」「学びの多様化」「ICTの活用」「心理的身体的安全」など昨今の教育トピックが並んだ。
- ・生徒目線を出した「求められる教員の資質・能力」が教員になった時には自分に向けられることに気づいて苦笑いする生徒も。

○ファシリテーターの実習生が意見を整理しながら、自由に意見を言い合い、学校で行われていることについての理解を深める。

・教育実習生という親近感があり、同じ目標を持ち、先行している存在：教育実習生と対話を通して教育について考えることはモチベーションを高める意味で非常に効果が高い。

・対話を通して、一つの意見を形成していく教育実習生の様子から高校生が学ぶものも多い。また学年も混合にしてあるので、その点も学びがある。初対面に近いグループもあるが、そこは同じ志を持つ者同士、議論が白熱する。



○グループで発表しあい、考えを広げ、深める。

・他グループとの比較により、意見の意外性や優先度の違いなど、あるいはそれを納得させるプレゼンテーション能力などから学ぶ時間になった。

・場所的・時間的制約から3～4グループでの発表会となるが、できればもう少し多くの発表を聞かせたい。

・「教職基礎」「教職基礎演習」履修済みの3年生も10名ほど見学し、GWから発表まで指導助言を行った。

キャリア教育実践事例④

学 校	平塚中等教育学校
担 当 者	リサーチグループ（地域連携関係担当）
実 践 事 例	『じぶんラボ』『せかいラボ』—社会とのつながりと自己理解
実 施 日 ・ 期 間	令和6年4月より
対 象 学 年	4年次（高校1年）～6年次（高校3年）

概要

本校では、総合的な探究の時間に、4年次（高1）では『じぶんラボ』を、5・6年次（高2・高3）では『せかいラボ』を実施している。いずれの取組も、生徒が自己の在り方や生き方を考えることを最重要に据え、社会との接点で得た経験を手がかりに自分について理解を深めることを目的としている。『じぶんラボ』で蓄えた自己理解を土台として、『せかいラボ』では Agency（社会に対する主体性）を発揮しながら実際に社会でアクションを起こす、あるいは活動から生まれたアイデアを外部の大会やコンテストにエントリーして社会に向けて表現することを求める。

活動内容

◆じぶんラボ（4年次）

・ターム A（4月～6月：オンライン講話）

ターム A では、毎回二名の社会人講師が登壇し、生徒はそのうち一名を選択してオンラインで受講する。文理選択期に、多様な生き方や仕事の実像に触れて視野を広げることをねらいとし、受け身の聴講に終わらないよう投票・チャット・Q&A などのインタラクティブな手法を用いる。また、講師の負担を抑えるため学校側で統一スライドフォーマットを用意した。講話の締めくくりには、出身学部を共有してもらい、職業と学部との意外な接点を示すことで、生徒の進路観に揺さぶりをかける。

・ターム B・C（6月～10月、11月～2月：プロジェクト型）

ターム B・C では、学校が企業・大学・NPO に依頼して企画した各タームおよそ 15 件の実社会プロジェクトの中から、生徒が関心に応じて一つを選んで参加する。内容は商品開発や地域課題の解決、観光・広報、記事制作、農園での実践、イベント企画など多岐にわたり、協力先との対話を通じて企画や実践、成果の共有を行う（プロジェクトの性質により進め方は異なる）。各ターム終了後に Google フォームで振り返りを行い、自分自身についての気づきを言語化することで自己理解を深める。回答は生徒自身のメールに自動送信されてポートフォリオとして蓄積されるよう設計している。

◆せかいラボ（5・6年次）

せかいラボは、じぶんラボで培った自己理解を基盤に、「社会の中で自分や自分たちをどう生かせるか」を実際に試す段階としている。活動は個人またはグループで行い、アクション型と研究型に分かれる。

〈アクション型〉

地域イベントの開催や啓発キャンペーン、新しいサービスや商品の試行などを通して、社会で自分たちの取り組みを直接試す。また、成果を外部の大会やコンテストに応募して試すこともできる。

〈研究型〉

課題を調査・分析し、得られた知見やアイデアを提案としてまとめることをゴールとする。最終的には、外部の大会やコンテストに応募し、社会に提示することを基本とする。

振り返り

振り返りの目的は二つあり、①これまでの経験から得た学びをこれからの生活や行事にどう生かすかを考えること（問 1～4）、②自分が大切にしている価値観や強み、興味・関心を改めて認識すること（問 5 以降）である。問 1～4 はコルプの経験学習サイクル（具体的経験→省察→概念化→応用）をベースに構成されており、単なる出来事の記録にとどまらず、得られた教訓を実生活につなげることを目的としている。問 5 以降は価値観リストや強みリストを手掛かりに、自分自身と丁寧に対話する構成としており、自己理解の深化やキャリア観の明確化を促す設計としている。

成果

生徒の振り返りには、自己理解の深化が明確に表れており、曖昧だった興味・価値観・強みに輪郭が生まれ、自分の言葉で具体的に語れるようになった様子が確認できる。講話やプロジェクトでの出会いが次の行動を考える契機となっている生徒も一定程度見られ、新たな領域への関心が芽生えたり、当初の志向を更新したりする動きが観察される。振り返りの記述からは、「メンバーと協力して企画を形にする中で、自分は調整や段取りが得意だと実感した」「IT に関心があると考えていたが、プログラミングよりもデータを分析して活用する部分に興味があると気づいた」といった自己の再発見や役割・関心の具体化が見られる。さらに、五年次にかけて校外での活動機会が増え、社会との距離が縮まった感覚が育ちつつあることも読み取れる。

課題

・プロジェクトづくりの幅と質

担当教員は基本的に学年の教員（9 名）であり、その中で分担する。よって多数のプロジェクトを立ち上げることはできないため、プロジェクトは各チームおよそ 15 件を目安としている。その限られた数の中で、十分な多様性と生徒にとっての刺激性をどう確保するかは課題である。

・中心教員の負担軽減と持続可能

協力先との調整や企画立案をリードする中心教員には一定の負担がかかっており、役割分担や外部連携を強化して継続可能な体制を整える必要がある。

・キャリア観の非線形性への対応

キャリア観は直線的ではなく行きつ戻りつしながら形成され、個人差が大きい。早々にせかいラボのような自分のプロジェクトに挑戦したい生徒もいれば、じぶんラボを繰り返して自分自身をじっくり見つめたい生徒もあり、この歩みの多様さを受け止める受け皿を設けることが求められる。

今後の展望

・プロジェクト選定基準の明確化と内容の充実

限られた件数の中で分野や活動形態に偏りが出ないように選定に工夫を重ね、多様で質の高いプログラムを提供できるようにする。15 のプロジェクトを大学の学部割り当て、分野のバランスを考慮しながら設計を行う。また、生徒と一緒にプロジェクトを行うことにとどめず、大人自身の歩みや価値観を語るなどして、生徒が刺激を受け、自分の将来像を考える契機となるようデザインする。

・外部との協働体制の強化

地域コーディネーター等の外部支援を取り入れ、学校と地域が役割分担して企画・運営を進める枠組みを模索し、活動の多様性と実効性を高めつつ中心教員の負担を平準化する。

・柔軟なプログラム設計

キャリアに関する生徒個々の状況やタイミングに応じて、じぶんラボとせかいラボを行き来できる運用を整え、4 年次での先行挑戦も、5・6 年次での基盤の積み増しも可能とすることで、生徒一人ひとりのキャリア形成に合った学びと挑戦を滑らかに接続していけるように計画している。

キャリア教育実践事例⑤

学 校	深沢高等学校
担 当 者	地歴公民科
実 践 事 例	模擬裁判
実 施 日 ・ 期 間	毎年 11 月頃・2 時間連続の 2 日間で合計 4 時間
対 象 学 年	1 年生

概要

本校のグランドポリシーでは「変化と多様性に富んだ社会で、自らの課題を探究し、主体的に解決に取り組む人間の育成」を掲げている。そのような背景から、自らの地域社会に参画する一員として主体的に行動できる人材を育てるシチズンシップ教育に力を入れており、総合的な探究の時間に様々な企画を取り込んでいる。

具体的な取り組みとしては、

1 年次：DIG「Disaster（災害）、Imagination（想像力）、Game（ゲーム）」

2 年次：HUG「Hinanjo（避難所）・Unei（運営）・Game（ゲーム）」

を行い、地域社会の防災について考えを深め、その仕上げとして防災学習を主眼とした修学旅行（東北三陸方面 or 阪神淡路方面）を実施している。また、防災以外の部分でも、神奈川県弁護士会と連携して、

1 年生：「模擬裁判」

3 年生（希望者）：「裁判傍聴」

を実施している。今回の事例紹介としては、「模擬裁判」を取り上げることとする。

事例紹介（模擬裁判）

1. 事前準備

当日までに「公共」の授業を通して裁判に関する基礎的な知識を学習する。特に裁判員制度についての理解を深めて、将来自らが関わる可能性が十分ある活動であることの自覚を持つ。

2. 弁護士による事前指導（2 時間分）

神奈川県弁護士会から各クラス 1 名（本校は 6 クラスなので計 6 名）の弁護士を派遣してもらい、前半の 1 時間では「弁護士の仕事内容の紹介」「刑事裁判の流れ」「事実認定の仕方」などを学ぶ。後半の 1 時間では、仮定の事例に基づいてどのような方法で事実認定をしていくか、グループワークを通して理解を深めていく。



【グループワークの様子】

(例) リビングのショートケーキを食べたのは誰か。

- ・ A 君がショートケーキを食べるのを見たという目撃証言
- ・ ショートケーキがなくなる直前、A 君がリビングに入るのを見たという目撃証言
- ・ ショートケーキがなくなった時、A 君が学校にいたという目撃証言
- ・ A 君による「食べてない」という証言
- ・ 口の周りにクリームがついている A 君が写っている写真



どの事実や証拠・証言が有力で、その証言が間違いなのかを突き詰めていく流れを学ぶ。

※同一の証拠を扱いながらも複数の解釈・判断が生まれること、裁判以外においても自らの思考を論理立てるために必要な過程であること、に気付くよう導く。

3. 模擬裁判に向けての準備

当日までに生徒の中から、裁判官役 3 名、検察官役 2 名、弁護人役 2 名、被告人役 1 名、証人役 1 名を決めておく。書記官 1 名、廷吏 2 名も可能であれば配役する。その他の生徒は傍聴人として参加する。配役が決まった生徒には、事前に模擬裁判劇の台本（仮定の強盗傷害事件）を渡して目を通させ、当日は台本に基づいた演技ができるよう準備させておく。

4. 模擬裁判（2 時間分）

前半の 1 時間では、生徒による模擬裁判劇の実演を見て、傍聴人を各グループに分けて評議を行う。後半の 1 時間では各グループの評議内容を発表させるが、その際には「判決（有罪・無罪）」「理由・根拠」を明確にするように注意する。

最後に、裁判官役の生徒が判決を読み上げる。



【模擬裁判劇の様子】



【グループ評議の様子】

5. 事後指導

振り返りシートを活用して模擬裁判全体を通しての学びを確認しつつ、この後の公共の授業においても振り返りを行う。

また、学びの継続性の観点からも、3 年生の夏休みには希望者を対象として実際の裁判を横浜地方裁判所で傍聴する校外学習を実施する。

6. 生徒の感想

「講師の指導により裁判劇を実際に演じることで、刑事裁判の流れを具体的に理解することができた。」「裁判制度に対する関心が高まり、将来裁判員に選出された際には責任をもって職務を果たしたいと思えた。」などの前向きな感想を抱く生徒が多くいた。

成果

一般的にシチズンシップ教育をすすめる成果としては、責任感と倫理観の育成や、主体的な社会参加意識の向上が期待されると言われている。本校でも、模擬裁判単体をみても「自分が裁判員になったら」「自分が被告になってしまったら」と社会におけるできごとを我が事として捉え、主体的に学びを深める姿勢を身に付ける一助となっている。ただ、単体での学びでは深まりに限界があるため、より効果を高めるためには重層的な取り組みを行う必要があると考える。

本校では模擬裁判や裁判傍聴などの司法関係以外にも、防災教育としてのさまざまな学びを取り入れたり、学校挙げてのボランティア活動で地域社会と定期的に協働したりする機会を設けている。教科の授業で得る知識と、それらの体験をつなげていくことで得られる深い学びは、生徒自身のキャリア形成に大きな効果をもたらすと考えている。

課題

模擬裁判においては費用が発生することが一つ課題である。また、多くの企画があればあるほど、準備する教員の負担が増す点も課題である。その結果、企画を漫然と流していくような流れが無意識に発生してしまうと、生徒への学びの効果が大きく減じられることになる。「企画を作った人間が異動したら尻すぼみ」にならないよう、年度初めの計画と定期的な修正が不可欠である。

キャリア教育実践事例⑥

学 校	横浜明朋高等学校
担 当 者	キャリアガイダンスグループ
実 践 事 例	総合的な探究の時間「スタート」
実 施 日 ・ 期 間	通年
対 象 学 年	全年次

概要

- 本校では、総合的な探究の時間を2単位に設定しており、そのうちの1単位分を毎日10時50分から11時00分までの「スタート」に充てている。
- 「スタート」では次のような学習の目標を定めている。
 - ・すべての学習の基本となる集中力、語彙力、読解力、表現力を強化し、興味・関心の領域を広げる。
 - ・時事問題等の理解を通じて社会や地域とのつながりを意識し、自己の責任を自覚する。
 - ・社会生活を送る上で必要な情報活用能力を身につけるための土台を形成する。
- 「スタート」の教材は教員が輪番で作成している。素材は新聞・雑誌記事や小説、エッセイなどから教員が自由に選び、以下のようなガイドラインに沿って作問を行っている。
 - ・適宜リライトを行い、400字程度の文章にまとめる。
 - ・文章中から漢字検定3級相当の漢字を選んで読み書きの問題を6問程度出題する。
 - ・文章読解に関する問題を1問出題する。
 - ・自分の考えや気持ちを問うなど、探究活動の一助となるような問題を1問出題する。

活動内容

- 生徒は「スタート」の Classroom に投稿された問題文をタブレット端末で確認し、事前に配付されている解答用紙に解答を記入する。
- 生徒は教員の解答、解説を聞いて答え合わせをした後、解答用紙をファイルに綴じて保管する。
- 生徒は定期試験ごとに、それまでの取り組みを振り返りシートに記入して確認し、解答用紙とともに担任に提出する。

成果と課題

- 継続的に取り組むことによって、所期の目標は一定程度達成することができている。ただし、10分間という限られた時間の中では、特に探究活動の一助となるような問題（問3）に取り組む時間を十分に確保することが難しい。

今後の展望

- これまでは毎日新しい教材に取り組ませていたが、学習効果をさらに高めるために、たとえば、金曜日にはその週に扱った中から一つの文章を改めて取り上げて、問3について考えを深めたり、クラスで意見を共有したりするなど、来年度に向けて活動内容の刷新を検討している。

◆ スタート ◆

が づ に ち きん よう び
4月25日(金)曜日

《 SNS と の つ き あ い 方 を み り ち ゃ む に 聞 い て み た 》

モデルでタレントのみりちゃんさんは、X(旧 ツイッター)やインスタグラム、YouTube などを利用し
て、その時どきに思ったことをつぶやいたり、プライベート写真を投稿したりしています。発信するだけ
ではなく、調べ物をする感覚で美容系の情報などを集めることもあって、SNSはご飯を食べるのと同
じくらい、みりちゃんさんの日常生活に入りこんでいます。

それだけに、SNSを使うときには十分な注意を払っていて、たとえば、自宅近くの風景が写ってい
るような写真を投稿しない、(ア)上ってから時間差を(イ)設けて投稿する、仕事のやりとりにダイレクト
メッセージは使わないなど、自分だけのルールを決めているそうです。

みりちゃんさんは言います。「(中学生、高校生たちは)使い方に気をつけないといけないという(ウ)イ
シキはみんな持っているけれど、少し(エ)キョウミが勝ってしまうこともある。対面だったら持つはずの
(オ)警戒心が、SNS上だとちょっと薄くなるような。私はSNSを開いたときに注意(カ)喚起のメッ
セージが出てきたらいいのと思います。ATMを使うと『詐欺に注意』という画面がでてきますよね。
そういう感じです。詐欺の場合はこういう手口に気をつけろっていう参考情報があるけれど、SNSだ
と何が危ないかという情報がなかなかない。定期的に実例が出てくるようになれば、みんなもう少し気
をつけるのではないのでしょうか。」

(2025年3月30日付「朝日新聞」を参考にしました。)

問1 文章中の下線部(ア)～(カ)の語句について、漢字で書かれているところはよみがなを、カタカナで書かれているところは漢字を書きなさい。

問2 次のA～Dの説明のうち、本文の内容と合っているものをすべて選びなさい。

- A みりちゃんさんは、ご飯を食べるのも忘れるくらいSNSに夢中になっている。
- B みりちゃんさんは、自宅近くでとった写真は時間が経ってから投稿するようにしている。
- C みりちゃんさんは、多くの中高生がSNSの使い方に気をつけていると思っている。
- D みりちゃんさんは、中高生がSNSを利用することを制限するべきだと思っている。

問3 SNSを使うときに、あなたはどんなことに気をつけていますか。

◆ スタート ◆

がつ にち きん よう び
4月25日(金)曜日

《SNSとのつきあい方をみりちゃむに聞いてみた》

モデルでタレントのみりちゃむさんは、X(旧 ツイッター)やInstagram、YouTube などを利用して、その時々思ったことをつぶやいたり、プライベート写真を投稿したりしています。発信するだけでなく、調べ物をする感覚で美容系の情報などを集めることもあって、SNSはご飯を食べるのと同じくらい、みりちゃむさんの日常に入りこんでいます。

それだけに、SNSを使うときには十分な注意を払っていて、たとえば、自宅近くの風景が写っているような写真を投稿しない、(ア)上ってから時間差を(イ)設けて投稿する、仕事のやりとりにダイレクトメッセージは使わないなど、自分だけのルールを決めているそうです。

みりちゃむさんは言います。「(中学生、高校生たちは)使い方に気をつけないといけないという(ウ)イシキはみんな持っているけれど、少し(エ)キョウミが勝ってしまうこともある。対面だったら持つはずの(オ)警戒心が、SNS上だとちょっと薄くなるような。私はSNSを開いたときに注意(カ)喚起のメッセージが出てきたらいいのと思います。ATMを使うと『詐欺に注意』という画面がでてきますよね。そういう感じです。詐欺の場合はこういう手口に気をつけろっていう参考情報があるけれど、SNSだと何が危ないかという情報がなかなかない。定期的に事例が出てくるようになれば、みんなもう少し気をつけるのではないのでしょうか。」

(2025年3月30日付「朝日新聞」を参考にしました。)

問1 文章中の下線部(ア)～(カ)の語句について、漢字で書かれているところはよみがなを、カタカナで書かれているところは漢字を書きなさい。

ア	撮	って	イ	もう	けて	ウ	意識
エ	興味		オ	けいかいしん		カ	かんき

問2 次のA～Dの説明のうち、本文の内容と合っているものをすべて選びなさい。

- A みりちゃむさんは、ご飯を食べるのも忘れるくらいSNSに夢中になっている。
- B みりちゃむさんは、自宅近くでとった写真は時間が経ってから投稿するようにしている。
- C** みりちゃむさんは、多くの中高生がSNSの使い方に気をつけていると思っている。
- D みりちゃむさんは、中高生がSNSを利用することを制限するべきだと思っている。

問3 SNSを使うときに、あなたはどんなことに気をつけていますか。
(略)

◆スタート解答用紙(5日分)◆

年 組 番 氏名

※日付とタイトルを記入し、各問に答えましょう。

月 日 ()			《タイトル》			
問1	ア		イ		ウ	
	エ		オ		カ	
問2						※設問に応じて解答欄を使用してください。
問3						

月 日 ()			《タイトル》			
問1	ア		イ		ウ	
	エ		オ		カ	
問2						※設問に応じて解答欄を使用してください。
問3						

※欠席した日の解答は、クラスルームで確認しましょう※

月 日 ()			《タイトル》			
問 1	ア		イ		ウ	
	エ		オ		カ	
問 2	※設問に応じて解答欄を使用してください。					
問 3						

月 日 ()			《タイトル》			
問 1	ア		イ		ウ	
	エ		オ		カ	
問 2	※設問に応じて解答欄を使用してください。					
問 3						

月 日 ()			《タイトル》			
問 1	ア		イ		ウ	
	エ		オ		カ	
問 2	※設問に応じて解答欄を使用してください。					
問 3						